

第3回

2023年 9月3日(日)
13:30~16:30

令和5年度 特別企画
事前勉強会

安土城跡・安土城天主 信長の館
旧伊庭家住宅 (ヴォーリス建築)

参加者23名

■安土城跡 (特別史跡)

公式 HP

<https://www.azuchi-nobunaga.com/>

久郷 良夫 氏のガイドのもと、参加者 23 名のうち 21 名で天主跡を目指し、石段を登った。説明を聞きながら歩くと、様々なことに意味が感じられ、また時を経て解釈が変わっていたりすることもあるようで、大変勉強になった。

以下、当日の説明の中から、抜粋して紹介する。

基本的な構造や成り立ちに関する知識は公式 HP をご覧いただきたい。

●大手道の石段は奥行きが広く、一段が大きいのが特徴。
(なぜか → 馬が登りやすいため)

●城内に家臣たちの屋敷 (羽柴秀吉邸、前田利家邸、徳川家康邸) があったとされているが、実際は確証がなく、今後の課題とされている。

●織田信長公の右筆として活躍した「武井夕庵 (たけい・せきあん)」の屋敷跡と古井戸の跡が確認できる。茶人としても活躍した人で、信長公に度々諫言したとも言われ、信頼が厚かったとされる人物。

●安土城では転用石として、石仏や、近くにあった当時廃寺だった九品寺 (くほんじ) の石が使われている。 ※ちなみに、転用石が一番多く使われている城は「福知山城」。見えているところだけでも 500 個と言われ、発掘調査で出土したものを合わせると、合計 1,000 個とも言われている。

●築城の際、天主近くにひきあげたとされる大きな石「蛇石」の存在が記録にあるが、蛇石と見られる巨石は発見されていない。真相は未だ不明。

●安土城の石垣には大きな石がたくさん使われているが、もともと山にあった岩を利用したものが多い。観音寺城なども同様。



●天主跡の礎石

ひとつだけ、斜めに盛り上がった石があり、焼け跡も見える。

- 大きな柱が倒れる際、負荷がかかり盛り上がったのだろう。つまり、城が焼けて倒れる際、主に斜めになっている方向、北側へ倒れたことが推測される。



●安土城は吹き抜けだったか？ 心柱があったか？

- 吹き抜けの指図が見つまっていることから、吹き抜け説が有名だが、最近では心柱があったのでは、という意見の方が有力。

●誰が安土城を焼いたのか？

- 6月2日 本能寺の変
- 6月3日 城の警護を任されていた蒲生賢秀が、信長の家族を連れ日野に避難するため退去。
- 6月5～8日 明智光秀が入城。(6月9日京都へ進軍、6月12日山崎の戦い)
- 6月14日朝 城を守備していた光秀の娘婿である秀満が、山崎の戦いで光秀敗北の知らせを聞き、城を後にする。その際、城に火をつけたのではと言われるが、焼けたのは15日なので、この説はなし。
- 6月15日 焼失

織田信雄が火をつけた説もあるが、動機もなく、甲賀郡土山にいたという資料もあり、考えにくい。城に残る財宝などを目当てに、押し入った野盗、信長政権に恨みを持っていた民が火をつけたのでは？という説も考えられる。真相が解明される日は来るだろうか…!?



■安土城天主 信長の館

〒521-1321 滋賀県近江八幡市安土町桑実寺800（文芸の郷内）

公式HP <http://bungei.or.jp/>

VR（バーチャルリアリティ）安土城シアターを鑑賞。
CGによって再現された安土城、城下町が美しく、先程歩いた安土山の広大な敷地にこのような世界が広がっていたのかと考えると、感慨深いものがあった。

もちろん、謎の多い安土城だけに様々な説がある上で、想像の部分も多く、映像の通りではないのは承知の上で、楽しんで鑑賞すると良いのではないだろうか。

次に、久郷良夫氏のガイドで再現された天主（原寸大）を鑑賞。



●金箔瓦

→ 安土城が最初と言われる。

安土城の金箔瓦は凹凸の凹面に金が施されている。織田政権下の特徴。
八幡山城や大坂城などは凸面に金が施されている。豊臣政権下の特徴。

●安土城の再現にも貴重な資料として活用されたルイス・フロイスの記録には、日本の地名や人名がローマ字表記で記されているので、当時の発音を知る点においても、貴重な資料とされている。

●天主5階には八角円堂に仏教絵画が、最上階の6階には道教をモチーフにした絵画が描かれている。仏教よりも道教を上に見ていた？ キリスト教は信じていなかった？ 歴史の古い道教を重視した？ その前に座することで神々を従えているという暗示？ さて、真相は…？

■旧伊庭家住宅（ヴォーリス建築） （市指定文化財）

〒521-1343 近江八幡市安土町小中191

見学料金：無料（維持管理のため、運営協力を募っている）
開館時間：10:00～16:00（受付は15:30まで）
開館日：木・金・土・日曜日、祝日、予約日
電話番号：0748-46-6324

VR技術で公開されている邸宅内
<https://omivr.net/iba.php>



◆木造二階建て（一部屋根裏3階）

◆屋根：天然石スレート葺きの切妻 妻入棧瓦葺き入母家

◆外壁：ハーフティンバーと呼ばれる化粧梁

◆建築年代：大正2年（1913年）、昭和9～10年に改造、昭和54年に保存のため修繕。

運営管理を担うボランティア団体「オレガノ」の副代表の城念久子氏に案内していただいた。

ヴォーリス氏設計による洋風の木造住宅で、当時としては異色の建築物。ヴォーリス初期の作品としても貴重である。発注者は「伊庭貞剛」で、貞剛の4男「伊庭慎吉」のための住宅である。ここに住んだ慎吉は、画家であり、八幡商業高校の美術教師、安土村村長や沙沙貴神社宮司なども勤めた。

【1階】

- 和風を基調としている。
- ヴォーリスの書の掛け軸や、数年前に見つかった慎吉の描いた掛け軸などが飾られている。
しゃれこうべが花魁の着物を着ていて、「花のかほ雪のはたへも はなれや貴方は 迷ふ色も香もなし」と添えられている。「いくら外見を着飾っても、中身は皆同じしゃれこうべ、いずれは皆こうなる」というようなことを伝えたかったのではないかとのこと。
- 襖絵…「春の図」「秋の図」は、鮮やかな色彩と大胆な構図が印象的。「秋の図」のすすきの穂は銀で描かれていて、上品に光って美しい。
- 廊下の天井…網代が用いられ、数寄屋風である。
- 階段を境に、洋室のリビングルーム、サンルームと続く。
リビングルームの八角形のテーブルと椅子、暖炉、暖炉上のランプは 100 年以上前のもの。柱や天井の梁にはなぐり加工がされている。



掛軸 手前：ヴォーリス書、奥：慎吉作



「秋の図」の襖絵



【2階】

- 洋風を基調としているが、建具や天井に和の様式を取り入れている。
- 慎吉のアトリエとして使われていた部屋の入り口は杉の 1 枚板による古い板戸（和風の引手がついている）が使用されている。洋間に続く入り口が和風の板戸というのが面白い。大きな作品などを出し入れしやすいように、との配慮だったよう。



ヴォーリスは建具や窓にも細やかな工夫を施しており、琵琶湖の葦を使った箴欄間（おさらんま）や、花頭窓があったり、隠し十字と言われる十字架を思わせる窓の細工や、光がたくさん入るような工夫が目にとまる。

この日は暑い日だったが、風がよく通り、和と洋、光と影の調和する感覚が心地よく、またゆっくりと訪れたいと思った。